# 第１２分科会「子どもの自主活動と自治的諸活動」

## 分科会の報告と討議のまとめ

討議の柱

Ⅰ　子どもたちの発達を保障する活動をどうつくりだし、自己表現と自治の力を育てていったか。

Ⅱ　子どもが抱える様々な課題を乗り越えて、認めあい、つながりあえる集団をどう育てたか。

Ⅲ　何を大切にして、集団づくりを進めたか(～新型コロナウイルス感染症禍でできること～)。

＜レポート報告　１日め＞

（１）筑紫

「７年目の弁論大会」

（２）糸島

「自分の思いを自由に言い合えるクラスをめざして」

（３）浮三

「１学年でとりくんできたこと」

（４）朝倉

「みんなが安心してそろえる学校をめざして動く生徒会活動を」

（５）朝倉

「みんながんばれ」

（６）福岡市西

「放送部や生徒会と連携した平和学習のとりくみ」

［一日めのまとめ］

○　上にあるように、５支部から計７本のレポート報告（内、１本当日持ち込み）があった。主な内容として、学校行事「弁論大会」や「チャレンジフェスタ」、また、「スローガンづくりの司会進行」「生徒会活動と連携した平和学習」等の役割を担うこと、そして、「生徒指導案件」を通して、子どもたちにどのような姿が見られたのか、私たち教員自身が感じたこと・考えたことを話し合っていった。

　その中で、話題の中心になっていたことは、「子どもたちがどれだけ自分の思いを伝えることができているのか」である。例えば、正しい指導だとしても物理的に感じる大人のパワーに「言いたいことを言えず我慢してきたかもしれない子どもたち。」「厳しい背景や家庭環境を持ち、大人に対してマイナスなイメージを持つ子どもたち。」そんな子どもたちにどんなことができるのか。考えられたことは、「対話」や「作文」、「DVD づくり」等を通して、相手意識を持たせて自分の思いを自由に表現することができるようにしたり、その表現が苦手な子どもたちに寄り添って書き方・話し方を教えたりすること等である。

　子どもたちが「言いたいことが言える場」「伝え方が分かること」を通して、少しずつ「自

分のことを友だちに伝える、伝えられる」、そんな人間関係が見られるようになった。また、「やろう」という子どもの気持ちを教員が拾い上げ、「できた」という成功体験。そんな姿や体験が大切な生きる力になるのでは、と考えられる。

○　最後に、共同研究者平野裕二さんより、総括として、次のようにあった。「短い時間であったが、充実した時間であった。聞いていて感じたことは、子どもたちの思い・感じていることに寄り添う姿のよさである。子どもに言いたいことを言えるようにするためのとりくみとその大切さが見られた。言いたいことが言えないことは、『命に関わる問題』である。気持ち・意見の表明の重要性を改めて感じた。それと同時に、『集団づくり』で『同じことができることを尊ぶ』風潮があるが、表面的な落ち着きは教員にとって助かるのは助かる。しかし、その落ち着きにアンテナを高く持つことも大切である。持続的な教育理念とも関連させて、誰一人も取り残さない視点を重視していくことの重要性を改めて感じた」と。子どもたちの自己肯定感を高め、将来を支える大人の育成にもつながる「子どもたちの心が触れ合える」ことといった本当に大事なことが今の現場にあるべきだと考える。